

— 深求・川にちなんだ万葉集の歌 —

万葉の川心 第6回

研究第二部 船田 園子

武蔵国の一首

埼玉の津における舟の風をいたみ

綱は絶ゆとも言な絶えそね

(巻第十四 三三八〇番歌)

昼下がりに表に出た。

すぐそばに慌ただしくごめく街の生気がうず巻いているとは想像もつかないほど、冬の公園はひっそりとしている。木々にはもう落とす葉もないのに、北風が枝にまとわりついて大空に消えていく。

凍った景色のなか、ひとりだけが動いている気がする。体の中で風が吹き抜ける。厚手のセーターの上から自分を抱くようにして風に逆らい、そのまま土手に登った。

地面を二つに区切ってゆったりと川が流れている。何もかもが固い冬の眠りについているのかと思っていたが、動いているものを見つけてなぜかほっとした。視線を落とすと、足元で草が川風に縮み上がっている。ここにも春を待つ仲間がいるようだ。

風というとどんなイメージをもたれるだろうか。自由に空を渡る風。移り気に惑わされてなお心ひかれる美しい女性のように、気ままに捕らえどころのない風。桜を散らす無情の風と同様、ここでは二人の仲を引き裂くものとして風が詠まれている。

埼玉の津に泊まっている舟の綱があまりの風の激しさに切れることがあろうとも、私への言葉は絶やさないでください。

言葉を絶やさないでくださいというのは女心であるかもしれない。女は目

に見えるもの、耳に語られる言葉を愛する傾向があり、男は目にも耳にも捉えられない何かで愛を表現するという。しかし頼みの綱がもし切られたらという理由のない不安におびえるのは、恋する男女に共通の思いではないだろうか。風が強く吹き荒れ雨戸を激しく鳴らす夜は、不安な気持ちに襲われる。それが今昔共通の思いであるように。

埼玉の津は、埼玉県行田市にある小埜沼辺りという説や、その近くを流れる利根川の渡し舟の発着場であるという説などがある。写真の歌碑は前玉神社境内にあり、地元有志が元禄十年に奉納したと刻まれている。この歌が詠まれてから千年近く経って、改めて土地の人々にこの歌の素晴らしさを伝えるべく、また誇りとして奉納したものではないだろうか。近くには稲荷山古墳や古代運もあり、埼玉の地にまつわる多くの神秘は、時を経ず誰かに見出だされるのを待っているかのようだ。

